

# 仏教企画通信

発行日 | 令和6年1月1日

74号

発行所 | 有限会社 仏教企画  
〒252-0116  
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
Tel. 042-703-8641  
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣  
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

## 山の信仰 信仰の歴史

私の家は、東京と群馬県の山村、上野村にあって、このふたつの家での暮らしが半世紀ほどつづいている。上野村は若い頃釣りに出かけた村で、自然の様子も村人のつくる世界も、私には相性がよかった。そんなこともあって上野村の家が欲しくなり、あるとき古

い家を譲ってもらった。私の家があるのは須郷という小さな集落で、数件の「近所」の奥には、すべてを飲み込むように山と森の景色が広がっている。

この集落には、須郷神社と呼ばれていた小さきやかな神社があった。神社なのに境内には石仏が何体もあって、神社らしくない雰囲気ももっていた。いまから二十五年くらい前、

寄り合いで集落の長老たちからひとつの提案が出された。須郷神社を神社本庁から脱退させるという提案である。長老たちがいうには、ここは神仏習合のお堂だった。須郷集落で暮らす人たちは御嶽信仰が強く、そのお堂だったのである。木曾の御嶽山を霊山として仰ぐ信仰で、御嶽修験道と結んでいる。ところが明治元年(正確には慶応四年)に神仏分離令が出され、さらに明治五年には修験道廃止令が公布されて、修験道は国の命令で禁止されてしまった。とともに神社の統廃合も進められ、須郷の神仏習合のお堂も神社化されてしまった。

長老たちの提案は、自分たちはこの経緯を子どもの頃から何度も聞かされてよく知っている。しかしこれからはそのいきさつを知らない人も出てくるだろうから、自分たちが死ぬ前に須郷のお堂を昔の姿に戻したい、というものであった。そのため神社本庁から脱退し、神社であることを終わらせるということである。長老たちの提案は満場一致で可決され、神社本庁に脱退する旨の通告がなされた。その後何度か神社本庁側からの説得がなされたが、集落の人々の意志は固く、須郷神社は須郷のお堂に戻された。



上野村産業情報センターとともに開催した餅つき。

この集落の家を譲ってもらったとき、私には少し考えなければいけないことがあった。元の持ち主は村を離れて都市で暮らしていて、私はその人から家と土地を譲ってもらった。東京の家ならこれですべて完了でいいのだけれど、村にいないような気持ちになつてくる。この家は、譲り渡されたその日から暮らせる状態だった。家の前まで道がきていて、電気も水道もある。ところが道も電気も水道も、集落の人たちが力を合わせてつくりあげたものなのである。たとえば水道の水は、山の中腹の湧

# 宗教と信仰、 平和の関係を 考える

民衆による信仰の歴史

内山 節

き水を利用している。この湧き水は弘法大師によって発見されたという伝承をもっているが、この伝承を信じている人はいない。この湧き水を山から引き、タンクにためて各家に水道として配る集落独自の水道である。



三国山を水源とする清流・神流川。上野村ではその環境維持に長く注力してきた。

これは集落の人たちがつくったものだ。電気も昔はかなりの負担金を払って電力会社にケーブルを伸ばしてもらう必要があったし、道路も自分たちで広げ、管理してきただ道が土台になっている。ということとは、私がここで暮らせるということは、集落のご先祖様のおかげだということになる。このことに対して私はどう対応したらよいか。

考え、すぐに結論が出た。それは家にくっついていてはダメだから、家を購入した時点で終了している。何も心配しないでよい、ということだった。この集落の長老たちは、朝起きると「般若心経」を唱えてから一日をはじめ暮らしをしてきた。長老たちは、自分たちが仏教徒であることを自覚していた。修験道は古くからある自然信仰と初期密教系の仏教が融合して生まれた信仰である。話を聞いていくと、昔はみんなで木曾の御嶽山に修行に出かけたものの、最近では長らく行っていないということだった。それなら、私はひとつの提案をした。集落の会計への寄付はいらないうことなので、その代わりに希望者を御嶽山に案内しようという提案である。マイクロバスを借りて、御嶽山の麓に泊まって翌日山に入る費用は私がもつ。そんな感じはどうだろうか。

この提案に、長老たちは喜

人でも、ましてや性別や偏差値などでは測れない力です。ところが、そういう自覚がなかなか持てない、特に女性の多くは「自分なんて大したことではない」とか「大事なポジションには男性がつくものだ」などと思いつくもの。挑戦を自ら制限してしまっていることも感じます。最近の言葉で「アンコンシャスバイアス」と呼ばれるこうした無意識の偏見や思い込みから自身を解放し、本来その人がもっている可能性を引き出すことに教育の目的があると思います。みんながみんな天下の秀才になる必要もないはずなのに、特別に優れている他者と比較して、「どうせ私なんか」と自信を無くして生きるなんて悲しいでしょう。自己肯定感を持ちにくい育ちをしている人は、今の時代でもまだまだ少なくないと思います。大事なことは、小さなチャレンジを重ねて、コツコツと成実力の何倍もストレッチしな



いど届かない問題よりも、まずは少しだけがんばれば達成できる課題を乗り越えることです。特に大人がすべきことは、次世代の一人ひとりが適切な課題を見つけのりこえるサポートだと思います。

**宗教と教育の共通点**

非合理的なことを言葉にしないという意味で、「子は怪力乱神を語らず」という儒教の言葉があります。デカルトやスピノザなどの哲学者やその系譜では、あらゆることを合理的に考えようとしてきました。何もかもこの世の全てを神が作ったと信じた時点で思考停止してしまう、それではいけない、と考えていたのです。現在も、教育を含めたあらゆる場面で、合理的であることが基礎となっています。しかし一方で科学を極めていくと理屈では割り切れないことが出てきます。奇跡のようなD



なくすることは残念だと言わざるを得ません。身近なところで起こるお葬式は、自分の人生、そして生と死を考ふる機会でもあったはず。一方で、儀式ばかりを重んじる伝統仏教にとっては、変化の時とも言えるでしょう。生きて迷っている人、苦しみに囚われている人、なぜ自分の人生はうまくいかないんだと悩んでいる人がたくさんいます。僧侶の皆さんはそれを、煩惱だと切り捨ててしまわずに、苦しみから抜け出す視点を伝えるような、そうした活動に期待しています。お経をそのまま読むだけでは伝わりにくいこともあるでしょうし、形式通りに檀家になれる人ばかりではないですから、どうしたら仏教の考え方が伝わるだろうか、と工夫してください。私が生まれ育った富山の立山町には、龍光寺という曹洞宗のお寺があり、私は三歳からその五百石保育園に通っていました。戦後は全国にお寺が経営する幼稚園や保育所がたくさんありましたね。これからのお寺には、高齢者ホームとか在宅ケアといった分野に関わってもらえたら良いなあと思うんです。人生の締めくくり方を悩んでいる方は本当に多いですから。なかなか他人と話せない死生観についてなど、宗教者の強みを活かして、助けになってもらえたらと願っています。

(取材・柳澤 巴  
撮影・羽柴和也)

NAのつながりや、あるいは私たちの日常でも合理的ではないことがたくさんあるでしょう。努力が必ずしも毎回報われるわけではないし、良い人でも苦勞の多い人生を生きていたり、良くないことをしている人が権力の座にのさばっていたり。そんな時、神様はちゃんと見ているとか、あなたに耐える力があるからその試練なのだとか、そんな言葉をもらおうとホッとできずすね。考え方を換え、次に進むための大事な気づきをくれる言葉だと思います。でもこうした言葉や価値観は、組織的な教育現場では伝え切れないですね。学習指導要領に入れることができないからです。こうした思いやりや気づき、新しい視点を示すことなど、まさに仏教の教えがいかにできるのではないのでしょうか。

**宗教者に願う、救い手としての存在**

社会の停滞が続き、社会不安を一人ひとりに感じている。不安な気持ちもわかりますが、しかし、不安を言い出したらキリがありません。きつと社会システムが順調だった時代でも、不安な人は不安だっただけでは何も変わりませんから「自分だけではない」と思え

ることが重要です。与えられた場所で自分のベストを尽くそう、と強い気持ちを持つこと。不安に負けてしまわないよう、宗教者の皆さんにはそうした人々を応援していただきたいと思えます。最近ではさまざまな事情で「お葬式をしない」と聞くことが増えました。家族だけで済まず家族葬、あるいは直葬という弔問も何もなく、火葬だけを行うことも多いようです。考え方はいろいろですが、死について考える機会が

なくすることは残念だと言わざるを得ません。身近なところで起こるお葬式は、自分の人生、そして生と死を考ふる機会でもあったはず。一方で、儀式ばかりを重んじる伝統仏教にとっては、変化の時とも言えるでしょう。生きて迷っている人、苦しみに囚われている人、なぜ自分の人生はうまくいかないんだと悩んでいる人がたくさんいます。僧侶の皆さんはそれを、煩惱だと切り捨ててしまわずに、苦しみから抜け出す視点を伝えるような、そうした活動に期待しています。お経をそのまま読むだけでは伝わりにくいこともあるでしょうし、形式通りに檀家になれる人ばかりではないですから、どうしたら仏教の考え方が伝わるだろうか、と工夫してください。私が生まれ育った富山の立山町には、龍光寺という曹洞宗のお寺があり、私は三歳からその五百石保育園に通っていました。戦後は全国にお寺が経営する幼稚園や保育所がたくさんありましたね。これからのお寺には、高齢者ホームとか在宅ケアといった分野に関わってもらえたら良いなあと思うんです。人生の締めくくり方を悩んでいる方は本当に多いですから。なかなか他人と話せない死生観についてなど、宗教者の強みを活かして、助けになってもらえたらと願っています。

日本の仏教は、こういう人々の世界とともに存在していたのである。それは教義でもないし、教団でもない。修験道は信行者のコミュニティはつくるが、基本的には教団を形成しない。山と結ばれた講が各地につくられていくだけである。元々は文章化された教義もとうとう消えていなくなった。それは山での修行を通して身体で感じとるもので、言葉が必要としない信仰だった。修験道は信仰ではあっても宗教ではなかった。

**宗教と信仰**

「なげ」と聞くと「年をとってもう山の頂までは登れない」と言う。「御嶽山は途中でスカイラインが通っているし、そのうえにはロープウェイもある。この方法で七合目か八合目まで行けるから、歩ける人はそこから頂を目指し、歩けない人はそこから参拝する。それでいいのでは」と私が言うと、「それでは御嶽山に申し訳ない」という答えが返ってきた。「下から歩いて修行してこそ仏の慈悲を感じることができないのなら観光になっってしまう、観光の山にしてしまったら御嶽山に申し訳ない」



上野村から望む美しい山々

のである。宗教は教義や教団を所有することによって形成されていくが、修験道にはそのいづれもが成立していない。それは修験道特有のものでなく、民衆自身がつくる仏教の世界に共通するものである。江戸時代にはすべての人々がどこかの寺の檀家になるが、だからといって自分が属する檀家寺の教義を正確に知っているわけではなかった。さらには言えば、特定の教団に属しているという意識もない。だがその人たちが仏教を理解してはなかったのかといえはそうではなかった。娑婆の世界で暮らす自分に穢れを感じ、しかしその奥には、閉じ込められている浄らかな世界が広がっているのを見いだして

**無事な世界**

いる。その浄らかな世界を開放したい。そう願うとき、浄らかな世界に導いてくれる仏の慈悲に気づいている。そんな意識とともにつくられていたのが、かつての民衆仏教の世界だった。

私達の村の家がある集落では御嶽修験道が展開していたが、日本の各地にそれぞれの地域の仏教が生まれ、それは自分たちの生き方を律する仏教だった。そしてこのような民衆仏教が定着している地域となくにある無事な世界を感じた。仏の慈悲を感じながら生きる人々がつくりだす無事な世界である。仏教にはふたつの性格が併存しているのだから、ひとつは宗教としての仏教、もうひとつは信仰としての仏教である。宗教としての仏教は、教義を学び、深めながら教団を形成していく。教義を研鑽する頂点に教団が構築されている。それが宗教の心臓である。ところが信仰としての仏教は、自分たちの生きる

世界のなかでつくられる。人間として生きることの苦悩を感じ、しかしこの世界の奥にも、そして自己の奥にも、浄らかな真理の世界が存在していることをつかみとる。この世界は仏とともにあることをみいだしているのである。仏とともにある世界を感じながら、自分たちの生きる無事な世界をつくる。そこに民衆の仏教信仰があった。ところが、信仰と宗教が完全に一体化し、教団が民衆の信仰をも支配するようにになると、宗教はときに平和を脅かすようになった。直接的、間接的に宗教が背後にある戦争を、人類はどれほど経験してきたことであろうか。日本でもかつては戦争協力した宗教教団が存在している。宗教と信仰の違い。宗教、信仰と平和の関係について語ろうとするのなら、私たちはこのふたつの違いとズレに目を向けなければならぬ。私にはそう感じられる。



内山 節(うちやまたかし) 哲学者。1970年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元宗教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』全15巻、農文協『半市場経済成長だけではない「共創社会」の時代』(角川新書)他多数。

**教育と宗教のつながり**

今こそ仏教に求めること

無意識ゆえに 見えにくい アンコンシャスバイアス

教育の意義は、誰もがみんな「可能性を持っている」と知ることにあります。どんな人にも、誰かの役に立つ強みがある。「あの人のために役立つ」という気持ちを持つていければ、それは菩薩と同じことです。子どもでも大

坂東眞理子(ほんどうまりこ) 昭和女子大学総長。1946年富山県生まれ。東京大学卒業後、総理府(当時)入省。95年埼玉県副知事、98年オーストラリア・ブリスベン総領事、2001年内閣府初代男女共同参画局長を務めたのち退官。04年昭和女子大学大学院教授、16年総長就任。著書に『女性の品格』P・H・P新書。他『70歳のたしなみ』小学館『女性の覚悟』(主婦の友社)など多数。

昭和女子大学総長 坂東眞理子さん インタビュー

11月1日から、ウクライナ難民支援の御朱印イベント「平和への祈りと禅語に親しむ巡礼」が群馬県で開催される。群馬12・13教区の合同主宰で、参加者に群馬県内の協力寺院を巡って朱印を集めてもらい、その志納金を難民支援に充てるというもの。オリジナルの専用朱印帳を用意し、参拝寺院数が増えるほど禅語が学べ、すべて参拝すると禅語帳が仕上がる。また、参拝先で配布される朱印も、各寺院が工夫した本イベントオリジナルである。

こうした支援活動を、教区を超えて行う事になった経緯や企画運営の心構えについて、このイベントの立役者でもある生沼善裕さんに伺った。

■どういった経緯で企画されたのですか。

私の寺院では、法要や催しの際に近所の貸衣装屋さんをよく利用しています。店主の高野さんは、カメラマンのアンドリュースさんとご結婚され、貸衣装に加えて写真撮影までお願いできるので、教区の他寺院も利用されることがあります。2020年にロシアがウクライナに侵攻し、多くの難民が出ている事を知った頃、アンドリュースさんがポーラン



遠い日本からの支援に驚いていました。

ドのご出身だったことを思い出しました。ポーランドはウクライナの隣国で、多くの難民を受け入れていました。アンドリュースさんから、難民の方々の困難な状況を伺い、我々にもなにかできないかと話し合う機会になりました。この問題に心を痛めていたご寺院様は多く、取り組むことに積極的でありました。また、私となりの教区に兼務寺を持つていることから、そちらの教区の方にも参加してもらうことになりました。

■御朱印集めはとも魅力的な企画ですね。

一般の方々に興味をもってもらえるよう、参加型のイベントにしました。参拝していただき御朱印をお授けするというのが双方のやり取りで良いと思いましたが、御朱印集めのブームも少し下火になっていたので、更なる付加価値を考えた必要がありました。前回は、一節の経文が書き込まれた朱印紙をお渡ししました。ウクライナカラーにデザインされた朱印紙が支援金となり、窓口のアンドリュースさんがシェラツ郡から避難所に必要な物資リストをもらいます。そして、支援金を元手にネットでポーランドのスーパーに物品を発送し、シェラツ郡の役所へ配送してもらいます。輸送コストが削減できるので支援金が有効に活用できます。

■今回の企画は、もともと継続的な予定だったのですか。

いえ、連続して行う事は考えていませんでした。ニュースなどで伝わってくるウクライナの状況は決してよくはなく、戦争は長引き、近隣諸国の情勢も不安定になっている

# 支援の気持ちをチャリティに



御朱印帳とともに記念撮影。子供たちは日本の菓子を喜んでくれた。

や企画運営の心構えについて、このイベントの立役者でもある生沼善裕さんに伺った。

■どういった経緯で企画されたのですか。

私の寺院では、法要や催しの際に近所の貸衣装屋さんをよく利用しています。店主の高野さんは、カメラマンのアンドリュースさんとご結婚され、貸衣装に加えて写真撮影までお願いできるので、教区の他寺院も利用されることがあります。2020年にロシアがウクライナに侵攻し、多くの難民が出ている事を知った頃、アンドリュースさんがポーラン

■御朱印集めはとも魅力的な企画ですね。

一般の方々に興味をもってもらえるよう、参加型のイベントにしました。参拝していただき御朱印をお授けするというのが双方のやり取りで良いと思いましたが、御朱印集めのブームも少し下火になっていたので、更なる付加価値を考えた必要がありました。前回は、一節の経文が書き込まれた朱印紙をお渡ししました。ウクライナカラーにデザインされた朱印紙が支援金となり、窓口のアンドリュースさんがシェラツ郡から避難所に必要な物資リストをもらいます。そして、支援金を元手にネットでポーランドのスーパーに物品を発送し、シェラツ郡の役所へ配送してもらいます。輸送コストが削減できるので支援金が有効に活用できます。

■今回の企画は、もともと継続的な予定だったのですか。

いえ、連続して行う事は考えていませんでした。ニュースなどで伝わってくるウクライナの状況は決してよくはなく、戦争は長引き、近隣諸国の情勢も不安定になっている

■今回の企画は、もともと継続的な予定だったのですか。

いえ、連続して行う事は考えていませんでした。ニュースなどで伝わってくるウクライナの状況は決してよくはなく、戦争は長引き、近隣諸国の情勢も不安定になっている

もう一年以上前のことになるが、一本の映画が公開された。笹谷遼平監督による『山歌』。かつて、日本の山々に実在していたという流浪の民「サンカ」をモチーフに、文明と自然のあいだに生きる人間の葛藤を描いた、劇映画だ。山に歌という不思議な字を当てたのは、もちろん笹谷監督だが、その意味するところも興味深い。いわく、言葉よりも先にあった原始的な節での伝達、山々に存在する人間の知性ではうまく捉えられない、うまく言葉にできないものを「歌」という言葉に託したのだという。

私はこの映画に出会うまで、恥ずかしながら「サンカ」のことをほとんど知らなかった。深い山々を放浪するように生き、ときに自然と人間の境界である里山に下りてきては、村々の軒先で箒を直したり、豊作を祝う歌を歌ったりして、またどことなく去っていく。ときに蔑まれ、ときに自然の恵みを一身に浴びる。そんな自然の一部となった人々の生き方のことを、全くと言っていいほど知らなかったのだ。しかし、映画を見終えたとき、現代のわれわれに問いかけるものが少なくないのではないかと気がしてきた。

笹谷監督は前作のドキュメンタリー、『馬ありて』の撮影中、人間と馬、ひいては人間と自然との関係を見つめるさなか、岩手県の遠野で忘れたい体験をしたという。あるとき、ちよっとした朝の散歩のつもりで山中に入ると、深い木々の美しさに、ぞくぞくとするような感覚とともに初めて「人外の力」を感じ、恐怖心を抱いたという。その感覚は自然への畏怖であったと笹谷監督はのちに語っている。自然とは、生命が目の前で抜け落ちていき、生と死が混然一体とした「人間が主導権を持たない世界」だ、と。映画『山歌』は日本の山々に実在した流浪の民「サンカ」をモチーフに、監督の中

に長くあり続けたその「人間が主導権を持たない世界」のイメージに、劇映画のかたちで再び迫ろうとした作品だということができるかもしれない。映画の舞台は1965年。今から60年近く前でありながら、現代に繋がる合理性がすでに社会に浸透しつつある時期であり、同時に日本人がどこか憧憬を持つ懐かしい里山の風景がまだ豊かに広がっていた時代でもある。

主人公の少年則夫の周りには、資本主義経済のなかでゴルフ場建設に乗り出す父がおり、一方で山々を放浪しながら自然の中でたくましく生きるサンカとの出会いもある。生きているか抱えた多感な少年に葛藤をもたらすことにもなる、これらの二つの営みは、いわば資本主義社会における個の膨張か、あるいは大自然という大いなるものへの帰依か、と置き換えることができるかもしれない。興味深いのは、この相反する二つの動きにどこかしら似たものが、作品ストーリーだけではなく、作り手である監督の中にも存在しているように思えることだ。

当初、「シナリオを書くのは一部の才能を持った人だけなのではないか」と考えていた笹谷監督が、思い立って自らサンカをモチーフにしたシナリオを十数本も書き、映画祭のシナリオ大賞を受賞し、練りに練ったプロットをもって物語を次々に組み立てていく。監督本人が「サンカ」に対する強いこだわりとシナリオ制作を「妄執」と表現するように、その過程は、まさに「こんな映画を撮りたい」と理想を追い求める劇作家笹谷の個の拡大だといえることができる。



## 個の小ささを問い直す —映画『山歌』に寄せて—

主人公の少年則夫の周りには、資本主義経済のなかでゴルフ場建設に乗り出す父がおり、一方で山々を放浪しながら自然の中でたくましく生きるサンカとの出会いもある。生きているか抱えた多感な少年に葛藤をもたらすことにもなる、これらの二つの営みは、いわば資本主義社会における個の膨張か、あるいは大自然という大いなるものへの帰依か、と置き換えることができるかもしれない。興味深いのは、この相反する二つの動きにどこかしら似たものが、作品ストーリーだけではなく、作り手である監督の中にも存在しているように思えることだ。

だが決定的なシーンも挿入される。これらは監督の練りに練ったシナリオを越えて、撮影現場で偶然にも立ち現れてきた予期せぬ瞬間だったに違いない。自然が練り広げる一度きりの偶然の一幕に、恍惚とカメラを回している監督の視線は、「こんなものを撮りたい」と願う劇作家というよりも、「こんなものが撮れてしまうのか」という驚きに向かって被写体になり寄っていくドキュメンタリストのそれであるように思われる。

それだけではない、山の中の撮影では蚊やヒルに何度も襲われ、豪雨にセットを壊され、増水する川からロープで脱出したこともあった。雨による撮影の延期が何度も続

き、シナリオの変更も余儀なくされた。要するに、撮影班は、山という自然の中の映画作りの過程で、何となく大自然からの「不意打ち」を食らったようなのだ。まさに「人間が主導権を持たない世界」がそこにあつたと言える。興味深いのは、その大自然による「不意打ち」を作り手がどう受け止めたか、である。主演の杉田雷麟は撮影を終えた監督に「普通の映画を撮るのであれば最悪の現場だが、この映画を撮るには最高の現場だった」という趣旨の言葉を残したという。監督としてもうれしい言葉であったに違いない。かつて笹谷監督が遠野の山の中で感じた「人間が主導権を持たない世界」への畏怖が、現場の隅々にいきわたっていたことを示しているからだ。制御のきかない自然の中で、作り手はどこかで自我を明け渡さねばならなかった。そしてむしろ明け渡すことでこそ、この映画が完成を見たのではないか。



子ども達に用意した文房具やお菓子などを布バックに入れ手渡した。

ているボランティア活動として、東日本大震災の後に現地に度々おもむき、今年も十三回忌として法要も行ないました。その後、台風により自分たちの地域も被災しボランティアを受ける側にもなり、継続することの難しさと同時に、継続して支援することが相手を励ますことにもなることを学びました。

ですが、支援活動には難しさもあります。我々は僧侶です。信仰の面での齟齬があったり、今回のような紛争地域、戦争状態の国に関する事は、とくに注意が必要

要です。我々の活動が、戦争への加担となることのないよう注意を払わなくてはなりません。活動の主題を「ウクライナ支援」としますと、「ウクライナによる戦争行為を応援する活動」と受け取る方もいるかも知れませんが、です。ウクライナ難民支援を主題としています。

■そういったノウハウも、教区で行われてきたこれまで

ウクライナ難民支援募金
【募金協力お願い】
ロシアのウクライナ侵襲により、いまだに800万人以上が他国へ避難しています。しかし、次第に国際社会からの支援が減ってきてしまっているのが現状です。
募金ポスターは、最も多くの難民を受け入れています。令和4年より、そのポーランド出身のアンジェラ・ワグネルさん、高野通子さん夫妻が現地関係者と連絡を取り合い、本誌に必要とされている物資を届けています。
群馬県内の曹洞宗寺院では、引き続きご夫妻と活動を共にし、難民となって故郷に帰れずつらい毎日をお過ごしの方々の支援をするため募金を集めています。ご協力をお願いします。

の活動から得られたものなのですね。こうした企画を成功させるかぎは何だと思えますか。それは「同じベクトル(方向と熱量)」だと思います。私達の教区で考えれば、ボランティア活動や、合同で行う法要やイベントが少なくはない教区ですので、お互いをよく知って、ある程度の関係が築けていたのだと思います。多様な住職の考えがある中で、この企画に協力してくれただご寺院様には、収入になりませんが、労力、手間はかかるので、ご負担の方が多いかもしれません。何ならお寺からの支出があるくらいです。それでも協力してくれるということは、困難な状況にある方への支援に少しでもなるといふベクトルが同じなのだと思います。

(聞き手・加藤順子)

旧統一教会への厳しい懸念の声 『仏教企画通信』72号アンケート実施結果

『仏教企画通信』では、令和5年6月1日発行の第72号において、旧統一教会に関するアンケート記事を掲載した。安倍元首相の銃撃事件以降、各種メディアにおいて様々な形でクローズアップされている旧統一教会は、信者に多額の献金を強いる組織的な不法行為が認められるなど、宗教法人として看過できない事例も多い。仏教企画においても、母親の多額の献金によつて家族が取り返しのつかない災禍に見舞われた女性の声(曹洞禅グラフ)第164号、165号)や、入信した妻による多額の献金被害を受け、現在は被害写真に携わる男性の現場の声(『仏教企画通信』第71号)を記事にするなど、事態を注視してきた。こうした背景を踏まえて、質問文では、全国の曹洞宗のご住職方が旧統一教会の問題についてどのような印象を抱いているか、調査を試みた。アンケートは本誌とともに送付した返信用はがきに記入していただくかたちで行われた。全国1474の寺社などに送付され、主に各寺院のご住職から、合計12枚の回答を得た。結果は以下のように

問1 政府は旧統一教会について、教団の不法行為や使用

問2 政府は旧統一教会について、解散命令請求をするべきだと思いませんか。
この問いについては、「1. 妥当だ」が11、「2. どちらかと言えは妥当だ」が1となり、「3. どちらかと言えは妥当でない」や「4. 妥当でない」といった回答はなかった。

問3 旧統一教会をめぐる問題について、思うところを自由に書きください。
また、自由記述欄には、下記のような声が寄せられた。掲載不許可のないものうち、主だったものを掲載する。

以下、大字の部分が質問内容です。
問1 政府は旧統一教会について、教団の不法行為や使用

統一教会を増長させてきた政治と社会の責任を真摯に反省し、対応していくことが私たちに求められていると思います。
このような金儲け集団を宗教として認めてきた日本政府の馬鹿者たちにも問題あり。即刻解散させるべき。
集団結婚や壺売りなどの時点で解散を命令すべきであった。政治家との癒着が問題だ。
宗教とは人が真実に向かって正しく幸福に生きていくための教えだと思えます。旧統一教会は、宗教とは言い難い偏った教え、間違っていた教え、人の心を操っているような教えだと思えます。
協力聖職者の責任は大きい。自由を確立していくことが大事だと思えます。旧統一教会のようでは今後ともどうなるか心配です。自由の確立をよろしく。

簡潔な記述ではあるものの、いくつかの重要な論点もある。まず、反セクト法のあるフランスを引き合いに出し、日本における家庭崩壊を防ぐための法整備の必要性を示唆するもの。ただ、この点は、法整備にあたって人々の信仰の自由を妨げる可能性や、いわゆる「カルト」の定義が曖昧であることなどを指摘する専門家もおり、慎重な判断が必要ではある。
もうひとつは、宗教と政治のつながりを懸念する声である。自由民主党を中心に、多

くの政治家たちが旧統一教会とつながりを持つていることが、安倍元首相の銃撃事件以降、次々と指摘されている。重要な政策決定に携わる政治家たちが特定の宗教団体との結びつきを強く持つことは、政教分離の原則に反するものであり、仏教界としても引き続き注視していかなければならない点である。
以上のように見てみると、過度な献金による信者家庭への悪影響、政治との過度な癒着といった二点に対する懸念が強く、全体として旧統一教会問題に対し、厳しい姿勢で臨むべきだという声が大勢を占める結果となった。ここには宗教者として、日ごろ仏教の活動に従事するご住職方の「懸念の声」が表れているといえるだろう。
本記事を執筆時点で、岸田政権が旧統一教会への解散命令に踏み切るか、との見方が出てきている。大局的には、「懸念の声」に社会が呼応しつつあるようでもある。
一方で、被害者救済法の成立後も被害者への補償が十分でないとの指摘もある。何より、長年にわたる多額の献金によつて歪んでしまった家族関係は容易には修復できない。たとえ解散が実現したとしても、取り返しのつかない人々の人生は続いていくことになる。然るべき人々に救いの手がいきわたるよう、仏教界(曹洞宗)としてもこの問題を引き続き注視していく必要があるのではないだろうか。

佐々木宏幹先生著

『仏教人類学の諸相』を読んで

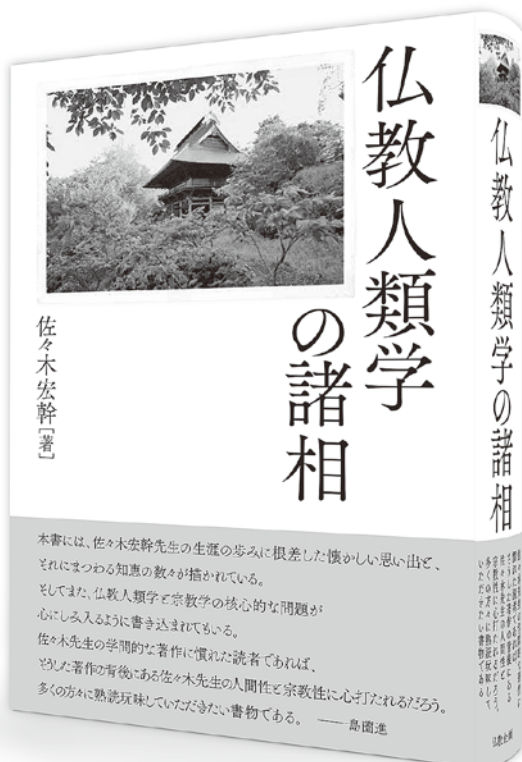
本書は数多い佐々木先生の御著書の中でも先生ご自身快心の一冊であろう。

私は先生より四歳年少の曹洞宗寺院東堂であり、長らく駒澤大学や宗門の学術方面に携わる間、先生には筆舌に尽くせぬ程の御薫陶を頂戴している。寺は千葉県の農村貧寺であり、先生のご生地とは比較にもならず、しかも東京に生まれ、寺に入ったのは第二次世界大戦の始まる歳。無道心者で仏教的環境は皆無に近かった。それが芽生えたのは、両親の急逝により一般大学から駒澤大学に転校してからであるが、五十年間の住職と研究活動が継続できたのは、先生の如き宗門事情に明るく宗教人類学を開拓された顕秀者に親近できたからである。

故に私には先生の専門分野を云々する力など全くない。だが、右の名著に感化されて咽んだ感涙の量は、従来読破した何千冊にも優る多岐の書物の場合にまさる。それは、私が今脳梗塞に加えて大怪我による車椅子生活に甘んじている事もあるが、本書に対する感激が尋常でなかったからである。本書に収められる大部分の項目が『仏教企画通信』に連載されていた時から、私は貪読しつつ、将来のお纏めを願望していましたが、それが現実となった今、愉悦に堪えません。

どうか仏教者は本書を座右に常置せられ、年配者は昔日を顧て懐旧と、自らの営為の正しさを確認され、新進の方々は今後の指針や方向性への糧として活用されることを心から希求するものであります。それにより、九十三歳にして今なお温顔矍鑠として活躍されている佐々木先生はますます破顔微笑のご活躍を続けられ、不肖の私も病にめげず一旗揚げることを誓つものである。
最後に、本書は佐々木先生の多彩な交流に彩られているが、再見するための人名索引を付して頂ければなお良かったと思えます。

龍泉院東堂 椎名宏雄 九拜



仏教企画刊
A5判上製 336頁 定価2,530円
(本体2,300円+税)
2023年9月刊行

ご推薦いただいています

- 國學院大学教授 石井研士先生
曹洞宗管長 總持寺貫首 石附周行禪師
駒澤大学名誉教授 佐藤憲昭先生
曹洞宗龍泉院東堂 椎名宏雄老師
東京大学名誉教授 島蘭進先生
國學院大学兼任講師 高見寛孝先生
二松学舎大学名誉教授 谷口貢先生
駒澤大学総長 永井政之先生
京都文教大学準教授 林ひろみ先生
愛知学院大学教授 林淳先生
国際日本文化研究センター名誉教授 山折哲雄先生
曹洞宗教化研究所 新水会会長 山路純正老師

(五十音順)

仏教人類学の諸相

佐々木宏幹著



佐々木宏幹(ささきひろき)さん
1930年宮城県生まれ。駒澤大学文学部卒業。東京都立大学大学院博士課程修了(宗教学人類学)。駒澤大学教授などを経て、駒澤大学名誉教授。文学博士。シャーマニズム研究の第一人者で仏教教理や寺院の実態にもよく通じ、日本仏教文化に関する論考も数多い。

ハガキ・電話・FAX・メールにてご注文ください。(送料が別途かかります)
仏教企画
ハガキ 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
電話 042-703-8642
FAX 042-782-5117
Eメール fujiki@water.ocn.ne.jp

編集後記



藤木隆宣

ネット時代を象徴するよう... ネット時代を象徴するよう... ネット時代を象徴するよう...

ようなので、その時期が来れば... 再度電話してくださいと約束... 再度電話してくださいと約束...

のことだった。いよいよかと思... 一日でも長生きされることを願... 一日でも長生きされることを願...

も成長がみられる。SNSを見て... SNSを見ていろいろ情報が流れて... SNSを見ていろいろ情報が流れて...

2024春・彼岸号 特集予告

2024年2月10日 発刊予定

曹洞禅グラフ

168号

柳田由紀子さん インタビュー

ノンフィクション作家

ステイプ・ジョブズに インスピレーションをもたらした禅僧、乙川弘文。その生涯をめぐって米国、欧州、そして日本へ。関係者を訪ねて歩いた8年の日々。

柳田由紀子(やなぎだゆきこ) 1963年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、新潮社入社。2001年渡米。著書に『宿無し弘文ーステイプ・ジョブズの禅僧』(集英社文庫/第69回日本エッセイスト・クラブ賞)、翻訳書に『ゼン・オブ・ステイプ・ジョブズ』(集英社インターナショナル)ほか。在ロサンゼルス。

手まり学園

寄附者御芳名(敬称略) R5.8.1~R5.10.1

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Total amount: 38,000

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

(\*部数により割引があります) すべて税別価格です

- 『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円\*
『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠 1,200円\*
『葬送のしおり』 長井龍道著 30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円\*
『曹洞宗檀信徒經典』 須田道輝解説 300円\*
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 靈元丈法著 140円\*
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 靈元丈法著 150円\*
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著 500円
『宗教人類学の地平』 佐々木宏幹編著 2,300円
『仏教人類学の諸相』 佐々木宏幹著 2,300円

\*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

発行日

Table with 2 columns: 発行日, 価格. Includes prices for 1部, 9部以下, 10部以上, etc.

お申込み

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。